

平成30年度 徳島県立農林水産総合技術支援センター農業大学校学校評価計画表

本年度の重点目標① 多様な進路に応じた人材育成 一人ひとりの社会的・職業的自立に向け、学生個々の進路やニーズに対応した教育を行い、生涯にわたる社会人・職業人としてのキャリア形成を支援する。		
課題	活動計画(具体的方策)	評価指標(数値目標)
① キャリアプランニング(将来設計)能力の育成	1 進路希望調査、三者面談、進路相談会等を実施し、一年次生のうちから学生に早期の進路決定意識を醸成させ、進路決定を支援する。	個人面談を年間3回以上実施し、1年次の後期開始時点での進路目標決定者を90%以上にする。
	2 公共職業安定所や人材育成会社と連携したキャリア教育を推進する。	1年次後期から2年次前期にかけ、公共職業安定所と連携した進路ガイダンスを2回以上実施する。2年次では人材育成会社によるキャリア教育を2回以上実施する。
② 個々のニーズに基づいたマンツーマン指導の充実	1 学生に基礎的・基本的知識を確実に習得させ、学力向上を図る。	職員の授業改善に係る肯定的評価を90%以上にする。 講義で行われる教養科目・専門科目、それぞれの不認定者数を10%未満にする。
	2 進学希望者には、「進学対応カリキュラム」により、学力向上を支援する。特に編入学試験等で必要となる英語・小論文・口頭試問においては、補習や個別指導を行う。	学生アンケートを実施し、「進学対応カリキュラム」と「個別指導」の有意義性に対する肯定的評価を80%以上にする。
	3 就職希望者には、就職セミナーやガイダンス等の実施により、早期から就職活動意欲の醸成を図る。 また、1年次より就職補習を定期的を実施し、基礎学力の向上を図ると共に、履歴書やエントリーシート等の作成を支援する。	就職セミナー、ガイダンス等を年間2回以上実施する。 2年次生を対象に、「履歴書の書き方講座」、「面接対策講座」を開催する。 就職補習に対する学生の肯定的評価を80%以上にする。
	4 学生のニーズに対応した資格取得特別講座を開催し、資格取得を支援する。	造園技能検定、危険物取扱者試験、毒物劇物取扱者試験、大型特殊免許、大型特殊けん引免許、日本農業検定、フォークリフト、わな猟免許、家畜人工授精師等に係る特別講義を開催する。学生の80%以上が特別講義を受講する。
	5 2年次生一人ひとりの進学・就職活動に向けて、面接・マナー・口頭試問等の個別指導を実施する。	面接・マナー・口頭試問の指導を充実するため、受験レポートを分析、作成した「就職試験受験報告書」、「就職試験でよく聞かれる質問集」、「就職試験面接指導マニュアル」の充実をはかり個別指導に活用する。 年度末の進路決定率を90%以上にする。
③ 高度情報化への対応とコミュニケーション能力並びに問題解決能力の育成	1 現在のパソコンにおいて事実上の「標準」となっている「Microsoft Office」の各ソフトウェアを活用できる能力を育成する。 実習や模擬会社の運営において、スマートフォンやタブレット等の情報端末の活用を推進する。	学生アンケートで情報活用能力に関する自己評価を実施し、ワード、エクセル、パワーポイントを活用できる学生を90%以上にする。
	2 プロジェクト学習における計画段階から調査・研究に至る一連の取組や、それらの成果や課題をまとめ、発表する機会を設定することにより、正確かつ的確な情報伝達能力、並びにプレゼンテーション能力を育成する。	コース内で、プロジェクト学習の進捗状況を発表する機会を、年間3回以上設定する。 学校行事として各種プレゼンテーションの機会を3回以上設定する。
	3 ワークショップやグループ活動等、知識を相互作用的に活用する機会を授業や実習に取り入れ、言語活動を活性化させることにより、思考力・判断力・表現力等を育成する。	コース演習の30%以上を、話し合い、討論、ワークショップ等の言語活動に充てる。

④	体験的な学習活動による実践力の育成と社会性の醸成	1	学生実習やプロジェクト学習を「そらそうじゃ」の業務や商品開発と一体とみなし、各業務担当ごとの実践的な運用手法を策定し、組織的に指導助言できる体制をつくる。	「徳島農大そらそうじゃ」の業務担当単位で活動する時間を、月1回以上確保する。策定する運用手法に対する学生と職員の肯定的評価を80%以上とする。
		2	模擬会社「徳島農大そらそうじゃ」の運営や活動を通して、個人の責任や協力を重んじる態度や姿勢を農業大学の文化として定着させる。	学生アンケートを実施し、模擬会社活動における「責任感」や「協力」等に関する肯定的評価を90%以上にする。
		3	「徳島農大そらそうじゃ」の活動や「きのべ市」の開催に関する広報活動を積極的に行い、「きのべ市」の知名度向上とファンの増加を図り、来店者の増加を目指す。	「徳島農大そらそうじゃ」HPとフェイスブックの中で、「きのべ市」の開催案内や模擬会社の活動状況及び成果を月に3回以上の情報発信ができるように取り組む。
		4	学生の研究課題や進路に対応した校外での「農業体験学習」を実施し、研修先での職業体験を通じて、実践力や人間関係能力を育成する。	学生が積極的に農業体験学習に参加し、知識や技術等の実践力を身につけたかを調査する。それらの肯定的評価を90%以上にする。
		5	「農業体験学習」に係る報告書作成や成果発表会等の活動を通じて、学生の気づき、発見、成果と課題等を共有させる。	事前・事後の指導を徹底すると共に、報告書作成に係る個別指導をしっかりと行い、成果発表会の不合格者数を0にする。
⑤	特別活動・課外活動の活性化による自主・自律性の醸成と仲間づくり	1	学生のサークル活動や自治会活動を充実させ、活力のある学生生活を支援する。	農大祭においてサークル活動や自治会活動の成果を展示する。 農学連スポーツ大会への全種目参加、ならびに競技の運営協力を通じ、他県の学生と交流を深める。
		2	学校行事(剣山登山、農大祭、収穫祭、スポーツ大会等)を活性化させ、積極的な参加意識を醸成するとともに学生間の仲間づくりを支援する。	各学校行事の事後アンケートを実施し、学生の満足度を80%以上にする。
⑥	積極的な教育活動の改善並びに学校運営の改善	1	定期的に課長会、コース会等を実施し、学生の学習や生活について情報交換をし、教育課題の設定並びに指導の標準化を図る。高等学校との連絡・連携を密にし、学生の生活指導や教育活動の改善に活かす。	課長会を月1回以上、コース会を月2回程度実施する。 組織アンケートを行い、学生の理解を深める情報交換や組織力等に係る職員の肯定的評価を90%以上にする。
		2	定期的に、学校教育目標に基づく具体的な取組のモニタリングを実施し、指導の進捗状況や適切さを評価する。	学校の組織化と職員の協働意欲の高揚を図るため、課長会において、コースや校務の取組やその課題について共有する場を設定し、体制の維持・発展を図る。 また、指導の進捗状況を適切に評価するため、校務分掌やコースの業務に関するモニタリングを年2回実施する。更に、外部評価も行うこととする。
		3	課長会において、最新の教育事情、学生指導、危機管理、コンプライアンス等に関する研修を継続的に実施し、教職員の資質向上を図る。	課長会において、教育指導改善や学校運営改善につながる研修(勉強会)を継続実施する。
⑦	心の通う人間関係を構築する能力の素地養成	1	学生間の人間関係におけるいじめなどを早期発見し対応する教職員組織をつくる。	「いじめ発見のための考察ポイント(教員用)」を、年2回教職員で確認し、問題点があれば速やかに対応する。
		2	学生ひとりひとりの人権意識を醸成し、学生間での人権意識の共存を確立する。	学生に「学校生活に関する調査」を年2回実施し、問題がある回答を記載した学生およびその関係する学生に、面談を通して聞き取りをし、必要な対処をする。
		3	より多くの関係者が学生の悩みや相談を受け止めることができるようにするため、学校と家庭が組織的に連携・協働する体制を構築する。	保護者が来校する三者面談等の機会をとらえて、「いじめ発見のための考察ポイント(保護者用)」を保護者に配布と説明をし、保護者がいじめを早期発見できるようにする。

本年度の重点目標② 地域農業への寄与

農業体験学習、模擬会社の運営、6次産業化への取り組みなどを通じて、社会との連携を深め、総合的な指導体制のもと、幅広い経営能力を養成するとともに、地域農業等に寄与する。

課題	活動計画(具体的方策)	評価指標(数値目標)
① 栽培から販売までの知識と技術を持った人材の育成 (生産技術コース)	1 栽培・飼養管理についてプロジェクトを通じて、栽培・飼養管理の実践することにより、体系的・実践的な農業の知識並びに技術を習得させる。また、先進的な栽培方法について知見を深める。	学生の栽培・飼養に関する知識及び技術を習得して、それぞれがこれまでの経験に基づく農業の課題解決に努め、生産技術の向上につながるプロジェクト課題を80%以上設定する。
	2 プロジェクト以外で、「農大祭」や「きのべ市」で販売する野菜や加工品、花苗等の栽培方法、利用方法等について学習する時間を設け、十分な知識を習得させる。	学生の農作物に対する栽培・貯蔵・流通・販売等に関する知識や経験を深めるために、生産現場の視察研修や実践を授業時間を活用して実施し、理解度を80%以上とする。
	3 プロジェクトに基づいて、「生産・販売計画」を作成、地域の特色を活かした作目の課題解決のための高度・専門的な栽培・飼養技術を実証するとともに、農業経営についての考察を行う。	地域に貢献できるような課題解決についてのプロジェクト成果について選抜し、その情報を地域社会に様々な手段により、発信する。
② 多様な地域資源を活用できる人材の育成 (地域資源活用コース)	1 地域資源を活用した先進事例や地域の地域資源に関する情報提供を積極的に行い、プロジェクト活動への取り組みに活かす。	教員から情報提供を行うと共に学生の発表機会を年間4回以上持つ。
	2 地域資源を活用した加工・販売の先進産地や市場の視察研修を実施し、最前線の情報をダイレクトにプロジェクト活動に活かす。	先進地での校外研修を年間2回以上実施し、学生の自己評価において、当該活用技術の理解度を80%以上にする。
	3 香酸柑橘「阿波すず香」の加工品の商品「阿波すず香胡椒」等について検討を重ね、品質を高める。 唐辛子を用いた加工品の検討と試作を行う。 鳴門わかめの未利用部分を農業生産へ活用する手法を検討する。	香酸柑橘の加工品の品質改善または商品開発を行う。 唐辛子を用いた加工品1品目以上の商品開発を行う。 鳴門わかめ未利用部分の活用方法の案をつくる。
③ 地域農業の振興につながるビジネススキルを身に付けた人材の育成 (アグリビジネスコース)	1 学外での実践活動における、市場調査等を通じて、消費者や社会のニーズを把握、分析させ、商品開発や販売戦略等に活かす。	市場ニーズの把握に取り組んだ学生プロジェクトを50%以上とする。
	2 コース実習、卒業論文等の課題解決の過程に「プロジェクトマネジメント」、「ブレインストーミング」等の各種の手法を習得させる。	1つ以上の課題解決のための手法を利用できるようになった学生を80%以上とする。
	3 学生のプロジェクトにおいて、「6次産業化」を視野に入れた新たな農業ビジネスモデルを研究・実践し、成果を卒業論文に盛り込む。	「6次産業化」を視野に入れたプロジェクト研究に取り組んだ学生を50%以上とする。
④ 栽培から販売までの知識と技術を持った人材の育成 (農業生産技術コース1年次)	1 栽培・飼養管理について役割分担し、日々の栽培・飼養管理を主体的に実践させ、年間を通した体系的・実践的な農業の知識並びに技術を習得させる。また、先進的な栽培方法について知見を深める。	学生が栽培・飼養に関する知識及び技術を習得して、それぞれがこれまでの経験に基づく農業の課題解決に努め、生産技術の向上につながるプロジェクト課題を80%以上設定する。
	2 「農大祭」や「きのべ市」で販売する野菜や加工品、花苗等の栽培方法、機能性や調理方法等について学習する時間を設け、十分な知識を習得させる。	農産物の栽培・貯蔵・流通・調理法等に対する学生の知識に関する調査を、来客に対し実施するとともに、生産現場の視察研修や実践を授業時間を活用して実施し、理解度を80%以上とする。
	3 地域の特色を活かした作目の課題を解決するための高度かつ専門的な栽培・飼養技術を実証するとともに、その技術の有用性を、作目の需要や生産効率なども含めて総合的に判断する力を育成する。	地域に貢献できるような課題解決プロジェクトを1課題以上選抜し、その成果を地域に発信する。

⑤	農作物の付加価値販売につながるビジネススキルを身に付けた人材の育成 (6次産業ビジネスコース1年次)	1	学生プロジェクトにおいて、「6次産業化」を視野に入れた新たな農業ビジネスモデルを研究・実践し、成果を卒業論文に盛り込む。	プロジェクトで「6次産業化」を視野に入れた農業ビジネスモデルの研究に取り組む学生を50%以上にする。
		2	学外での実践活動における、市場調査等を通じて、消費者や社会のニーズを把握、分析し、商品開発や販売戦略等に活かす。	プロジェクトで市場ニーズの調査を行う学生を50%以上にする。
		3	コース実習、卒業論文等の課題解決の過程に「プロジェクトマネジメント」、「ブレインストーミング」等の各種の手法を習得させる。	1つ以上の課題解決のための手法を利用できるようになった学生を80%以上とする。
⑥	地域農業への寄与のための体制づくりと、研究成果や学生生活に係る積極的な情報発信	1	平成24年度より導入した加工関連講座を充実させ、商品開発に取り組み、地域社会へ発信する。	コースや模擬会社において、加工品を2品以上試作し、地域に発信する。
		2	学生の研究や学校生活、「そらそうじゃ」の活動状況等定期的な広報等を作成する。 また、農大ホームページその他の情報発信ツールを活用して農業関係機関、関連企業、高等学校だけでなく、一般社会に対しても積極的に情報発信を行う。	教育活動に関する広報紙を年間12回以上作成して公開する。 ホームページを2週間程度で更新し、最新の情報を地域社会に発信する。
		3	本校の教育活動に関して積極的な情報発信・広報活動を行い、未来の徳島県農業を担う意欲と活力に満ちた新入学生を確保する。	高校訪問を年間2回以上行い、高校でのガイダンスにも積極的に参加する。 また、義務教育や高等学校の依頼があれば、キャリア教育に係る体験的な活動の実施に協力する。